

2021年秋季大会「学生セッション」レポート

【「学生セッション」新設！】

日本語学会 2021 年度秋季大会の 2 日目（10 月 31 日）に、日本語学会初の試みとなる「学生セッション」が行われました。

これは後述のように、多くの学生が研究発表の経験を積み、その研究を発展させる機会が得られるようにとの目的で新設されたものです。

本レポートではこの「学生セッション」初回の様子をお伝えします。学会で発表することに関心がある、また同世代の人がどのような発表をしているのかに関心がある、若き研究者の方々の参考になれば幸いです。

【学生セッションとは？：研究準備発表として】

日本語学会では、従来から大学院生による研究発表も多く行われてきましたが、より多くの学生が研究発表を行う機会が得られるように、この「学生セッション」が新設されました。ポスター発表の形式をとります。

このセッションは「研究準備発表」とも題されているように、研究が完成していない段階でも発表することができます。採否の審査はありません（研究倫理上の問題がないかの事前確認はあります）。日本語学会の「学生会員」であることが条件です。

位置づけとしては、学会発表そのものというよりは、これまでの研究過程・現況を色々な人に見てもらい、コメントをもらい議論することでその研究の発展・完成に役立てる場であると言えます。これから研究発表を始めたい、研究者としてのスキルを培っていきたい人に向けたものです。よって、このセッションで発表した内容（を修正・発展させたもの）を後に日本語学会の本発表や、他学会の発表に出すことも認められています。

【発表者・発表テーマ】

大会企画運営委員会や理事会からの積極的な呼び掛けもあって、初回ながら積極的な応募があり、発表人数は 21 人でした。大学院博士課程の学生による発表が最も多かったですが、修士課程の発表者も 10 名近くあり、また学部生による発表もありました。

発表テーマもバリエーションに富んでいました。比較的多いのは、現代語の文法につい

てのもの、および非母語話者による日本語使用についてのものでした。その他、語彙、音声、言語行動（挨拶行動やポライトネス[言語使用の丁寧さにかかわる分野]など）、他言語との対照研究などの発表が見られました。また、分析対象としては現代共通語の他に方言を扱ったものも多く見られ、日本語史についての発表も複数見られました。

なお、今回の発表者・発表題目は大会ページ（下記）にてご覧いただけます。

https://www.jpling.gr.jp/taikai/2021b/2021b_program/

【発表内容】

1つの発表の中で、(1)研究の目的・問題の所在、(2)研究対象・方法、(3)分析とその結果、(4)今後の課題、といったことが示されました。今回、学会からポスターのテンプレート（下記）が提供されていたこともあってか、どの発表も上記の事項がよく整理して示されていました。

<https://www.jpling.gr.jp/wp-content/uploads/2021/08/poster-template-1-200831.pptx>

アプローチとしては、最初に大きな問題意識があって、それに関するデータの収集・分析を行うものや、あらかじめ「○○という現象は△△という要因に基づくのではないか」といった仮説を提示して、それを検証するものがありました。すでに最終的な結論まで示すものもあれば、データを用意した上で分析の中間報告（現時点での見立てなど）を示すものもありました。

研究手法も研究内容によって様々であり、各種のコーパス（言語分析のために調整されたデータベース）を用いたもの、文献資料を1つ1つ見ていくもの、内省（言語表現の適格性などを自身の言語規範によって判断すること）によるもの、発表者が採取したデータ（談話の録音、テスト結果など）を分析したもの、等がありました。

【発表の様子(1)】

今回は、大会全体がオンライン会議システム Zoom による開催となったため、この学生セッションもオンラインでの実施となりました。各発表が Zoom のブレイクアウトルームを1つ割り当てられ、発表者以外の参加者はそれぞれの関心に応じて幾つかのルームを行き来するという形です。時間帯やルームによって参加人数は異なっていましたが、多い時間帯にはどの発表にも10名以上が集まり、賑わいを見せていました。中には、最大時30名近くが参加したルームもありました。

一般のポスター発表と同様に、「コアタイム」1時間・「フリータイム」15分という枠組みで実施されました。

「コアタイム」では、ポスターを用いての発表者によるプレゼンテーションと、それに対する質疑応答が行われます。今回はオンラインなので、ポスターに見立てたスライドを画面共有してプレゼンテーションが行われていました。画面上なので、その時に説明している部分を拡大して示すことが可能なのは、オンラインならではの利点と言えましょう。また、音声に関する研究では音声データをその場で再生することも行われていました。これは対面の時にも行われていたことですが、オンラインだと一層やりやすいようでした。

おおむね、最初に発表者から5～10分程度のプレゼンテーションがあり、質疑応答に移り、質疑が一段落すると2巡目のプレゼンテーションに入る、という流れで「コアタイム」は進行していました。オンライン発表に慣れていない人が多かったかとは思いますが、カメラに視線を送るなどの工夫が見られました。

その後の「フリータイム」では、逆に発表者から参加者に質問をしたり、発表内容からやや離れた、より自由なやりとりが行われたりして、他研究者との交流・意見交換の機会になっていました。また、ポスター以外の資料（元データ、追加報告など）を見せるといったことが簡単にできるのもオンラインならではの思われました。

【発表の様子(2)：質疑応答】

「学部生・大学院生の研究を会員のみなさまで育てるセッション」（学会メーリングリストより）と位置づけられたこの学生セッション、初回ながら様々な質問・コメント・アドバイスが発表者に寄せられました。音声によるやりとりが主でしたが、Zoomのチャット機能を利用したの応答も見られました。

質問としては、大別して以下のようなものがありました。

分析内容：「この分析は〇〇にも当てはまるのか」「今回の結果には〇〇という要因も影響しているのではないか」「この用例を〇〇に分類させた基準は何か」「発表で言及されなかった〇〇という現象についてはどう解釈されるのか」等。

分析の基礎となるデータの性質：「この資料はどのような性格のものか」「この資料を〇〇のデータとして用いた理由は何か」「〇〇は分析対象に含まれないのか」等。

先行研究との関係：「引用文献〇〇の分析と今回の分析はどう異なるのか」「今回の研

究結果はこれまでの研究に対してどういう新規性や関係性を持つのか」等。

その他のコメント・アドバイスとしては、以下のようなものがありました。

分析の方法：「この分析は、むしろ〇〇と考えるべきではないか」「分類の基準としては、今回の〇〇よりもむしろ△△を用いた方が目的により適応するのでは」等。

データの選び方：「もし〇〇の解明を目的とするのであれば今回扱われなかった△△という資料を対象にするとより良いのではないか」「〇〇ということを示したいのであれば、△△のようなデータも示した方が良い」等。

説明の方法：「データをこのように用いる場合には〇〇についても言及すると良い」等。

関連情報の教示：「(今回の発表で使われていない) このデータベースで検索すると、こんな例が見つかった」「今回の発表に関係する資料／先行研究として、こんなものがある」等。

いずれも、この研究をより説得力のあるものとするためにどういった点への目配りが必要かについての示唆に富んだもので、研究の進め方を（発表者はもちろんのこと、他の参加者も）学べる貴重な機会になっていました。質疑応答は、発表者にとっては事前準備がしにくい部分であり緊張されたかと思いますが、どの発表者も落ち着いてしっかり受け答えをされていたのが印象的でした。

またこの他、「自分はこの発表のこの部分を面白いと思った」といったコメントも積極的になされていました。発表者にとっては自分の研究の意義や面白さに自信を持つ機会にもなったのではないかと思います。

質問やコメントは、いわゆる研究職に就いている人からだけでなく、学生等からも積極的になされていたのが印象的で、みんなで活気を作り出しているのが感じられました。中には、発表者が引用した論文の著者から質問があったりもして、発表者にとって大きな刺激になったのではと思われました。

【おわりに】

以上、今大会で新設された「学会セッション」の様子をお伝えしました。これを参考に、これから研究発表を始めていきたい方々が学生会員となって次回以降のセッションに積極的に参加してくれることを大いに期待しています。また、一般会員の方々もセッションに

どんどんご参加いただき、これらの瑞々しい研究に励ましを与えていただきたく思います。

なお「学生セッション」の募集に関わる Q&A が下記に公開されていますので、こちら
もご参照下さい。

https://www.jpling.gr.jp/wp-content/uploads/2021/05/QA_gakuseisession20210913.pdf

※本レポートは、日本語学会ジュニア会員制度等検討ワーキンググループ（田中牧郎[委員長]・小林隆
・田中草大・津田智史・間淵洋子・茂木俊伸）の取材に基づくものです（本文執筆：田中草大）。